

平成17年9月6日大水害

あれから10年

教訓は生かせるか：

>29<

パネルディスカッション

「災害の教訓を生かす」
自助・共助・公助

【杉尾】では、福島さん、お願いします。

【福島】それでは、「自助・共助・公助」の観点から、消防団の立場でお話をさせていただきたいと思ひます。

皆さんも「存じの」とおり、わが国はその位置、地形、気象などの自然条件の中から、地震、台風、豪雨などによる災害が発生しやすい環境にあります。

もう皆さんの記憶から遠ざかろうとしているかもしれませんが、平成7年に発生した阪神・淡路大震災、

ております。

そういった大きな災害に対応するためには、やはり日ごろの消防団の活動、消防団の皆さんがその地域にあつて、いろいろな地域、皆さんと交流を重ねることが大事なことではないのかと思ひております。

「災害は忘れたころにやってくる」と言いますが、今は「災害は忘れないうちにやってくる」と言ったほうが正しいと思ひます。

特に、日ごろの地域に密着した活動の経験を生かして、行方不明者の捜索および倒壊家屋から数多くの人々が救出されたといったことが東日本大震災でもありました。

このことから考えてみれば、消防団の日ごろの活動がいかに重要であるかということが分かつていただけるのではないのかと思ひます。消防団の皆さんは、仕事をしながら、地域住民の安心・安全のために一生懸命頑張っております。どうぞよろしくご指導ください。

今後、少子高齢化に伴って弱者対策が求められております。お年寄りの方、また障害の方、そういった方、



台風14号では多くの住宅地が浸水し、消防団が避難呼び掛けや救助に尽力した平成17年9月6日、延岡市西階町

そういったことについて、今若い団員の方が取り組もうとして

- コーディネーター 杉尾哲（宮崎大学名誉教授）
- パネリスト
首藤正治（延岡市長）
図師雄一（宮崎県土整備部長）
大塚法晴（元延岡河川国道事務所長）
森川幹夫（九州地方整備局河川部長）
猪狩信浩（NPO法人宮崎県防災士ネットワーク理事長）
福島宏一（元延岡市消防団長）
亀長馨（元北方町川水流区長）

災害は忘れないうちに… 消防団 日ごろの活動が重要

防災・減災を考える
シンポジウムから――